

持続可能な地域づくりを目指して

～大井川鉄道の過去と今を見つめて～

奈良市立都跡小学校 三木 恵介

(1) 単元名

持続可能な地域づくりを目指して
～大井川鉄道の過去と今を見つめて～

(2) 単元の目標

- 大井川鉄道の成立から現在までの産業の移り変わりを理解するとともに、インターネットや資料を活用し現在の大井川鉄道の取組について必要な情報を集め読み取る。 【知識・技能】
- 現在までの大井川鉄道に関わる人々の取組や思いについて考え、持続可能な地域づくりのために大切なこととは何かを適切に表現することができる。 【思考・判断・表現】
- 大井川鉄道の歴史や取組に関心を持ち、持続可能な地域づくりという課題に対して意欲的に追及するとともに、自分たちが暮らす地域の持続性について考えることができる。 【主体的に学習に取り組む態度】

(3) 単元について

・教材観

大井川鉄道は、静岡県中部を南北に縦断する 1925 年に創立された私鉄である（元国有）。当初の目的は、木材輸送と沿線開発であったが、水力発電による電源開発のためのダム建設用にも用いられていた。1960 年代に南アルプス国立公園が指定され、沿線の寸又峡温泉などの開発に伴い、沿線を訪れる観光客が増加した。しかし、高度経済成長に伴うモータリゼーション化と沿線の過疎化、林業の衰退などが同時に進行したことにより輸送人員は減少、収支も悪化する。

このような現状を受け大井川鉄道は、鉄道の観光資源化に向けた取り組みを開始する。それが SL 運転である。1976 年、国鉄の線路上から SL が引退したその年に、大井川鉄道は SL 運転を開始する。また車内を「お座敷客車」「展望客車」などに改造し様々なイベントを行ってきた。さらに関西大手の私鉄車両を譲り受けて使用するなどして、多くの鉄道ファンを惹きつけ、一定の顧客を獲得した。さらに近年、「機関車トーマス」とタイアップした「トーマス号」を運行（期間限定）したり、千頭駅での「トーマスフェスティバル」を開催したりすることで子ども・家族層も取り込み、集客を拡大させることに成功している。

しかし、課題も残されている。大井川鉄道は、大井川本線と井川線という 2 つの沿線から成っているが、上記した SL やトーマス号は大井川本線までしか走行していない。つまり、大井川本線

は多くの観光客増を果たしているが、井川線まで SL・トーマスの恩恵は届かない（寸又峡温泉も本線よりさらに北に位置している）。このような課題に対しても現在様々な取組が進められている。

本教材では、このような大井川鉄道の歴史を過去と現在の2つ視点から見つめ、持続可能な社会を構築するためには「何が必要」で、「何ができる」のかを考えさせていきたい。

・児童観

鉄道の目的とは何か、と児童に問うと多くは、「移動するため（交通）・荷物を運ぶため（輸送）。」と答えた。鉄道が産業（林業・発電）と結びついていると考えるのは、車社会が進んだ現在では困難なのであろう。

また地域の持続可能性について言及した学びはこれまでに行ったことはない。本校は世界遺産の3サイトを校区に含む、観光地と言える地域である。しかし、家庭が観光業に関わっていたり、自身が観光客と接したりする機会をもつ者はほとんどいない。本校の多くの児童は、自分たちの地域を観光地として意識はしていない。改めて、観光地としての地域を見つめなおす活動にしていきたい。

・指導観

指導については次の3点について特に留意したい。

1点目は、鉄道と産業の結びつきである。多くの鉄道が都市と都市を結んだり、環状線の形態採っていたりするのに対して、大井川鉄道は山間部に沿線を伸ばし、終着駅も山間部で終わるといふ特異な鉄道である。児童には、なぜ大井川鉄道がそのような沿線となっているかに注目させ、林業や電力開発のためのダム開発と密接につながっていることに気付かせたい。

2点目は、持続可能な社会についての学びである。豊かな自然環境（多様性）と人々の暮らしが関わり合い（相互性）、適切なバランス（循環性）を保つことによって持続性が成り立っていた大井川鉄道のかつての実態を学ぶことで持続可能な社会のために必要な要素とは何かについて学びを深めたい。

3点目は、大井川鉄道に住む地域の人々の取組と観光の持続可能性についてである。林業の衰退やモータリゼーション化によって過疎化が進む大井川地域は現在、観光を推進している。大井川鉄道沿線で暮らす人々の、地域を持続させていこうとする取組を知ることで、自分たちの暮らしを見つめ直すことのできる学びとしたい。また、現在の大井川鉄道の取組は、果たして持続可能性を保っているのかという学習問題にも迫らせたい。

・ESDの観点

【かつての大井川鉄道からの学び】

- I. 多様性：豊かな森資源と水資源が保たれていた
- II. 相互性：森資源と林業 水資源と水力発電
- III. 循環性：森林保全と林業の適切なバランス 水資源を活用した電力供給

かつての大井川鉄道は持続可能な社会を構成する上で必要な「実態概念」の3要素を満たして

いた。大井川鉄道の歴史を学ぶことで、持続可能な社会を築いていくために必要な要素を理解することができる。

【現在の大井川鉄道からの学び】

- IV. 公平性：将来にまで自然環境を保全した上での観光推進
- V. 連携性：自然環境、鉄道、地域の人々とのつながりを意識した観光推進
- VI. 責任性：大井川鉄道を遺していきたい、地域を守っていきたいという人々の願いや取組

一度は持続可能性を失った大井川鉄道は、人々の様々な取組や思いによって持続可能性を取り戻しつつある。現在の大井川鉄道の姿を学ぶことでESDの「規範概念」を学ぶことができる。

(4) 評価規準

ア. 知識・技能	イ. 思考・判断・表現	ウ. 主体的に取り組む態度
①大井川鉄道の成立から現在までの産業の移り変わりを理解している。	① 持続可能な地域づくりのために大切なこととは何かを考え、適切に表現している。	①大井川鉄道の歴史や取組に関心を持ち、意欲的に調べたり、考えたりしようとしている。
②インターネットや資料を活用し現在の大井川鉄道の取組について必要な情報を集め読み取っている。	②現在までの大井川鉄道に関わる人々の取組や思いについて考え、適切に表現している。	② 大井川鉄道の取組をもとに、自分たちが暮らす地域の持続性について考えようとしている。

(5) 単元展開の概要 (全7時間)

	主な学習活動	学習への支援	評価・備考
1	○大井川鉄道についてインターネットで調べる。 ○大井川鉄道は、どんな所と言えるか考えをまとめる。	・インターネットを利用する。 ・SLやトーマスについての記載が多いことに注目し、観光地として有名な場所と気付かせる。	ウ①
2	○どうして大井川鉄道が作られたのか考える。 ○大井川鉄道は自然環境と産業が密接につながりあっている地域ということを知る。	・地図などを利用して、自然環境に着目させながら考えさせる。	ア①

3	<p>○地域可能な地域にはどんなことが重要か大井川鉄道を例にして考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自然環境が保たれていることに気付かせる。 ・自然環境を利用した産業を行っていることに気付かせる。 ・人の営みと自然環境がバランスよく保たれていることに気付かせる。 	イ①
4	<p>○現在の大井川鉄道の実態・取組についてインターネットなどを利用して調べる。</p> <p>○観光地としてどのような取組を行っているか、調べたことをまとめる。</p>	<p>○すでに林業が行われていないことに気付かせる。 →持続性の喪失</p> <p>○トーマス号や SL を中心とした取組で再度地域を活性化させていることに気付かせる。</p>	ア②
5	<p>○大井川鉄道の観光地化は本当に持続可能か考える。</p>	<p>○かつての大井川鉄道の実態とどこが異なるのかに注目する。 →3時間目の学びとの相違</p> <p>○トーマス号を活用した取組は、自然環境や産業とはかかわりが無いことに気付かせる。 →トーマスは外的資本であり、土着性も持続性もない</p>	イ①
6	<p>○トーマス号が走っていない井川線の取組を調べる。</p>	<p>・外的資本に頼らず、地域の特性や地域の人の工夫で観光地化を推進しようとしていることに気付かせる。</p>	イ②
7	<p>○自分たちの地域が、持続可能であり続けるには何が大切かを考える。</p> <p>○自分たちに何ができるかを発表する。</p>	<p>・持続可能な社会のために重要なこと（多様性・相互性・循環性）をポイントとして、自分たちの地域を見つめ直していく。</p> <p>・どうしてその活動を考えたのか、理由を明確にして考えさせる。</p>	ウ②



大井川沿線の豊かな自然環境



豊富な水資源を利用したダム開発



茶畑が広がる大井川鉄度沿線の暮らし



大人気のトーマス号



多くの鉄道ファン



地域の人のおもてなし